

PRO-LIFE

中絶に反対する運動

2001年4月 No.126

胎児を守る運動

子宮のなかでも学ぶ赤ちゃん

研究によると、あかちゃんはず宮の中でも物事を学んだり覚えたりすることができるのだそうだ。オランダの医師たちが、赤ちゃんがある一定の音に反応したり、応答したり、あるいは認識したりできるかどうかを実験した。すると、胎児は最初に聞いた音に動くことよって反応するが、後に音に慣れてしまうと反応しなくなるということがわかった。医師たちの話では、胎児は音を記憶することができ、そしてその音が危険ではないことを「学んでいる」と言う。医師たちは、生後37〜40週目の25人の胎児に実験を行った。子宮に向けてアコースティック音を発し、胎児の足の上あたりにめがけた。胎児の一人一人が反応した。その後4回続けて音を聞かせて身体が動かなかつた場合、胎児が音に反応しないように「学んだ」のかどうかを見極めることにした。医師らは最初は10分後、そして24時間後とに間隔をおいて音を聞かせた。

「音に慣れる」

胎児のうち6人は音に対して不規則な動作をするためにこの研究からはずされた。残りのあかちゃんは全員音に「慣れた」ために反応

しなくなつた。10分後そして24時間後に試されると、胎児はさらに早く反応が止まった。マーストリヒト大学の医師のキャセリン・ヴァン・ヘレン医師は、「この研究が、胎児には短期と長期にわたる記憶力があることを明らかにしたと語っている。最初の実験と比べて、胎児は10分後により早く反応したただけではなく、24時間後にも同じように反応している。つまり、胎児には最低10分の短期的記憶力と最低24時間までの長期的記憶力があると結論づけることができる。」さらに医師は、「胎児には、認識するために複数の刺激が必要であるが、それでも子宮内の刺激を記憶することができる。」と続ける。今までは、赤ちゃんは生まれたときには機能的な記憶力は伴わないとされてきた。

今までの研究でも赤ちゃんは記憶することができるかとされてきたのだが、それは誕生後に試されたものだった。誕生前に実験を試みたのは今回がほぼ初めてであり、彼らが記憶したり学んだりすることができると示唆したのである。

(この研究は医学誌「ザ・ランセット」に報告されている。)

幹細胞研究の躍進

「イタリアの科学者による実験上の大発見は移植研究における胎児使用をめぐった激しい倫理的叱責騒動の火に油を注ぐ結果となった。」と雑誌「自然神経科学」の10月号に書かれている。この論争では幹細胞を巡って火花が散っている。幹細胞とは原始的な細胞で科学者達はこの細胞を実験皿で培養し体内に移植することによって損傷した臓器例えばアルツハイマー病で傷ついていた脊髄や脳を治療出来るようにしたいと思っているのである。

科学的に最も期待される幹細胞は受精後数日の胎児にある。その細胞には子宮の中で身体の中の部分にも発達しうるはずな能力がありやがてはクローンされ実験室で育てられ移植用組織の万能の供給源となるのではないかと夢が膨らんでいる。しかし胎児の幹細胞の使用については熱い議論が展開されている。他の多くの国と同じくフランスでも胎児を科学的に使用することを道徳的理由から禁止している。イギリスとアメリカでは幹細胞の使用を特定の研究目的に限って認めるという用心深いガイドラインを発行している。

胎児を使う研究に反対する人達が挙げるこの問題の解決法は新しいけれど大きく見落とされてきた探求分野である「成人の幹細胞」である。この胎児幹細胞使用反対の立場はイタリアのミラノにある国立神経病学研究所と幹細胞研究所の研究者達に率いられるチーム

によって強化されてきている。科学者は大人の脳から取り出した幹細胞を使い培養液と動物の体内の中で骨格筋肉を作った。これら幹細胞のプロゲラムを作り直すシグナルはそれまで考えられていた分泌によってではなく他の細胞との細胞膜接触から来るものであるらしいことが分かった。神経幹細胞が他の神経幹細胞と接触するとニューロンと神経システムの電気絶縁体のような働きをする神経膠活性細胞が生み出される。そして神経幹細胞が筋肉組織と接触すると筋肉が作られるのである。

この雑誌の論評の中で神経科学者チャールズ・ジェニングス氏はこの研究は期待できるものであるが大人の幹細胞の限界が分かるまでは胎児の幹細胞を使った研究をやめるべきではないと言っている。ただ「この研究結果は少なからぬ反響を呼ぶことになりそうである。近頃出ている他のいくつかの報告などもいっしょに人間幹細胞研究の道徳性についての耳障りな議論の増加に新たな拍車をかけるのではないかと警告している。つい最近まで成人の幹細胞はある特別な大人の組織の中にしか存在しないと思われていてその幹細胞をプロゲラムし直すことは不可能とされていた。成人の幹細胞の不明瞭さはそれが微量な量しか存在せず分離して精製するのは難しいと信じられていた事実によっていっそう広がっていたのであった。」

イーガン大司教、胚ではなく成人細胞のさらなる研究を提言

バイオ医学の技術の進歩が余りにも速く、科学的倫理性の域を飛び越えて進んでしまっている、という警告は宗教の指導者たちからしばしば発せられてきた。しかし最近幹細胞研究の分野で新たな発見が相次いだことから、ヒトの胚を用いた実験が抱える倫理的ジレンマが科学そのものによって解決されるのではないか、という期待が出てきた。

ニューヨークのエドワード・イーガン大司教は研究者たちに、ヒトの胚が損なわれた時のみ実施可能な胚性幹細胞（ES細胞）研究という広範な分野から、一部の研究者によって発見された成人幹細胞という新たな可能性の方に注意を向けるよう促した。

「もし成人幹細胞が胚性幹細胞のどちらかに取り組むような機会が与えられたとしたら、他人の心の底に潜む感情を尊重して、研究者は成人幹細胞の方を選択すると思います」とイーガンはアメリカ医学学校協会の会合で述べた。

しかし成人幹細胞を使用する方法を開拓した研究者でさえ、

幹細胞研究のジレンマが科学的に解決されるのでは、という大司教の期待は時期尚早かもしれないと感じている。

「胚性幹細胞の研究から得られる知識無くしては、成人幹細胞に関するいくつかの基本的な問題について論ずることさえ出来なかつた」とニュージャーシーのロバート・ウッド・ジョンソン医科大学のアイラ・ブラック博士は述べた。「成人幹細胞の研究は始まったばかりなのです」

カトリック教会の最も重要なポストの一つであるニューヨーク教区の大司教に五月に任命されて以来、イーガンが地元オーク・パークで公の場に姿を見せたのは、月曜日の演説が始めてであった。

しかし68歳のこの大司教は、ローマカトリック教会の科学との対話に関してはベテランである。それはしばしば、ハイテクの進歩と、長年伝えられてきた教会の教えとがぶつかり合う場となっていた。現在、バイオ医学の研究の最先端では幹細胞についての理解が深められている。幹細胞とはヒトの体内でいろいろな役割を担えるように自らを適

応させることが出来る細胞であり、ガンを破壊したり脊髄の損傷を克服することさえ可能かもしれない。

ここ十年間のほとんどの研究では、28個以下の細胞からなるヒトの胚に見られる幹細胞に焦点が当てられていた。科学者たちは、まだ特定の分化機能を帯びていないそれらの幹細胞を取り出して、成人や子ども、損傷を受けたたり病気になるってしまった組織の代わりとして利用することができると信じている。

胚性幹細胞の公的機関における研究についてはいまだ議論がなされているところだが、私的な研究機関では堕胎された胚ですでに使用している。使用しなければ破棄されるだけだ、と当事者たちは言う。教会側は堕胎された胚や胎児を使用するあらゆる幹細胞研究に反対する。それによって受けられる恩恵は決して一人の人間を殺すことを正当化することは出来ない、そのような研究方法自体が人のいのちの価値を減ずるものである、という理由からである。

しかしブラック博士他による最近の研究では、成人の組織内

の幹細胞が、ある特定の機能のためにすでに分化しているにもかかわらず、新たな役割に適応することが出来るかもしれない、ということが示された。例えば血流内の成人幹細胞は、自らを脳の組織に作り替え、損傷を修復することが出来るかもしれない。

イーガンが月曜日に述べたことは、妊娠中絶、研究の自由、モラルの権威、といった、両者の意見が分かれる論争についてはさっておき、科学者と信仰者が胚性幹細胞研究をめぐる論争から共通の抜け道を探るチャンスを与えるものであった。「科学者と信仰者はともに真実の探求に乗り出したのです」とイーガンは研究者や教区の管理者二五〇人の聴衆に話しかけた。「お互いの意見に耳を傾ける必要があります」

ニュージャーシーの自分の事務所からブラック博士は同じく両者の協力を呼びかけたが、問題を極端に単純化して討議することは避けるべき、と警告した。「誰も皆、歩けなかつた人に歩けるようになって欲しいし、しゃべれなかつた人にしゃべれるようになって欲しい、と思ってい

る。我々が直面しているような、両者が対立し非難し合う状態というのは最悪の社会的雰囲気である」

健康、信仰、道徳の研究のためのパーク・リッジ・センターの所長であるローレンス・オコネル氏は、幹細胞研究の倫理性についての議論はかなり進んではいるが、その大部分は科学者の世界だけにとどまっている、と述べた。宗教的グループの立場は妊娠中絶に対するその組織の姿勢を反映しがちだが、多くの宗教的指導者や大部分の平信徒にとつて現在の科学は余りにも斬新で戸惑いを覚えるものなので、確固とした意見が生まれにくい。

「このことを各家族が肯定的、あるいは否定的に感じるようになるにつれて（どちらの可能性もあるのですが）今後この話題について耳にする機会が増えるでしょう」とオコネル氏は述べた。「そして宗教的コミュニケーションはそうした社会の中で建設的な批評家として機能を発揮することが出来るのです」

スティーブ・クローエン

人口受精のビジネス化

「試験官ペビーの父」とされるイギリスのロバート・ウィンストン教授は、自身の立場を若干逆転させたイタリアのアヴェニール紙は報告している。60年代の人工受精のパイオニアであるウィンストン氏は、今日、これらの技術は不妊に悩むカップルにとっての本当の必要性や利便性について議論されないまま行われていると語っている。そして、その結果、医者は不妊治療法について真剣に研究しなくなっってしまったとウィンストン氏は言う。このような現象の真の理由は、これらの技術が今ではビッグ・ビジネスとなっていてからなのである。手術はいずれもナシヨナル・ヘルス・サービス以外の場所で行われており、三千ドル以上もかかっているのが現状である。

このロバート・ウィンストン氏の発表を元に、アヴェニール紙は氏の訴えが他の医師や科学者たちにも支持されているのかどうかを明らかにする調査を独自に行った。ローマのカトリック大学婦人科学部のサルヴァトル・マンクソン教授は、「事実です。私たちは何度も失敗してストレスのたまった女性を頻

のであり、正常に移植される確率は15%以下なのです。だから、今後さらに研究を深めなければならぬ重要な分野がたくさんあります。」私たちは妊娠初期の大事にするべき状態についてあまりにも知らなすぎます。また、胎児が自然と見つかる落ち着く場所や母親の身体とのコミュニケーションのとり方についてなど、ほとんど知らない。

(ロバート・ウィンストン氏2008.22.取材)

節欲？

快楽が中心の世界では、

この言葉はなんの意味もないいつも間違った所に愛を求める人には、

この言葉はなんの意味もない他人の意見や容認ばかり気にする人には

この言葉はなんの意味もない今の事しか考えず、未来に目を向けない人には

この言葉はなんの意味もない「何が手に入るか」しか考えない人には

この言葉はなんの意味もない自分には目的がないと思う人には

この言葉はなんの意味もない完全に迷える世界では、

この言葉はなんの意味もないこの言葉はあなたに何か

節欲

この言葉はあなたに何か

意味がありますか？

ジュリー・ジョンソン

フランス司教団、中絶法案を嘆く 実施拡大を容認する法案に異義

フランス司教団は、妊娠中絶をさらに受けやすくする内容の政府法案に対して声をあげた。その法案は、未成年が親の承諾なしに中絶できるとし、また法的に認められる中絶期間を妊娠10週から12週に伸ばすというものである。

この提案は、「医学的見地から

も、あるいは心理学的、家族的、

社会的そして哲学的でないかなる

見地からも正当とはいえない。」

と司教団の常任評議会の声明

の中で、司教たちは強調してい

る。この声明には評議会会長の

ルイ・マリール・ビル大司教及び他

のメンバーらが署名している。

フランスで法的に中絶が認め

られるようになって25年、その

間一年に72万のいのちの誕生が

あるのに対して、中絶件数は20

万とされている、と司教団は記

している。これらの数字をつき

つけられて、「本来は、採択され

る法案の含蓄や結果について厳

密な検討があつてしかるべきであ

る。中絶を経験した女性のいの

ち、心、身体については特にそう

あるべきである。」と声明は続く。

フランス政府によれば、本法案の目指すところは、「自分の身

体を処理する権利を女性に認め、多産過程を自分たちでコントロールできるようにするもの」であるようだ。しかし、司教団の声明は問う。「闘争的な言葉は抜きにして、生まれて来る子どもの死が関わるというのに、一体何の権利について語っているつもりなのだろうか？」

『自分の身体を処理する』代わり、一体どれくらい女性が男性の意志に頼っていて、また孤独さや絶望から社会に見捨てられたと感じているだろうか？時がたち、彼女たちが自分が直面した問題を子どもへの死によって解決したことを理解した時、また自分の身体の中に死を体験するという過酷な行動をとった時、一体何が起こるだろうか？

フランスの司教評議会の声明は、危険な状態にある妊婦が真に救われ、致命的な中絶以外の解決策を見つかることができるように、特に政治家のようにこの分野で責任のある人たちが、可能と考えられるあらゆる手段をとるようという訴えで締めくくられている。

クローン研究はどこまで認められるべきか？

クローンの進歩は非常に早く、科学の乱用を防ぐためにも新鮮な議論が必要とされている、と世界医学協会の議長が昨日語った。

ジョージ・ワシントン大学医学センターの研究者たちが、一卵性双生児に導く過程を研究室において繁殖させたと発表した一九九三年の人間クローンについての初めての興奮から、科学は大きな発展を遂げた。

英国のグループも含めて、現在ではいくつかのチームが確立された二つの手法を使って人間の胚をクローンにしたいと望んでいる。一つはエディンバラのロスリン研究所が開発したもので、もう一つはハワイ大学が昨年発表した「ホルルル技術」である。「我々のスタンスは、人間のクローンはあってはいけないということである。」とWMAのアンダース・ミルトン議長は言う。「だが、いつたどこで線を引きべきなのかを見極めるために、私たちはさらに学んでいかなければならない。」

人間の胚が定期的にクローンで造られるという予想は現実のものになりつつある。患者自身の細胞や組織をクローンで造ることによって糖尿病や心臓病などという

た種々の病の治療法を商業的に開

発しようという試みがなされているためである。現代の研究においては、クローン人間を造り出すのに代理母にクローンで造られた組織を移植するのではなく、初期のクローン人間の胚を取り除いて移植や器官の治療のために組織を育成させることを計画している。評論家たちは、これらの作業がクローン・ベイビー第1号になる恐れがあることを主張している。

昨年、WMAの会合において、人間のクローンを造ることにかかる研究を控えるようにと医師たちに呼びかけた一九九七年の決意が再確認された。だが、今新たな論議が必要とされている。問題は「医学界と社会の未来に影響を及ぼす重要で潜在的な結果についてであり、私たちは倫理上の問題も全て考慮したと確信できなければいけないのである。」

WMAは、BMAを始めとする70の全国医学協会の団体を代表しており、10月にイスラエルのテルアビブで毎年開催される総会においてクローンについて討論する科学セッションを設けることになっている。

移植を目的にクローン技術を

使って組織を造ろうと躍起になっている企業の中に、ゲロンというカリフォルニアの会社がある。そこは、2年前に羊のドリーを成功させたロスリン・インスティテュートと最近になって技術提携をしたところである。

このロスリンとゲロンのどちらの企業も、人間のクローン製造をするつもりはまったくないと強調している。しかし、両者とも細胞及び移植用組織の元となる人間の胚を造りたがっていることには間違いがない。

まず、科学者たちは細胞の核、すなわち組織を必要とする患者の体から取り除かれたものを核を取り除かれた未受精の卵子に移す。その結果、「再プログラムされた」卵子は電気ショックを加えられ、胚に成長するようにされる。

もし政府が人間の受精・胎生学当局の忠告に従えば、科学者たちは研究のために認められている最高14日までの間、胚のクローンを使って、損傷を受けた心臓の治療のために使われる神経細胞や筋肉組織などあらゆる組織に成長する造血幹細胞の元を作り出し、患者に対して使用することができると、この手法を試みているのがエジ

ンバラ大学の遺伝子研究センターのオースティン・スミス博士が率いるチームである。博士はすでにHFEA免許を取得しており、IVF胚の予備を使って造血幹細胞の研究ができるのである。その造血幹細胞は、約百の細胞からなる6日目の胚に成長するものである。

この作業は現行法のもとで許可されているものである。なぜなら、これは、胚の研究が認められている5つの分野のうちのひとつであるIVF手法を進歩させるものとされているからである。しかし、もし政府が許可すれば、造血幹細胞を作り出すためにクローン技術を使いたいとスミス博士は語っている。そして博士はさらに、「目立ちたくはない」と言いながらも関心を示しているイギリスのグループがいくつかすでに存在することを付け加えた。

いのちが受精の瞬間から始まると考える多くの人々は、胚のクローンを分解することに異議を唱える。昨年ウエルカム財団の依頼で実施された調査によれば、人間の胚の破壊につながるという理由から医学的治療のためにクローン技術を利用することには多くの人が疑念を抱いていることがわかった。

人間の胚の創造を回避するある試みが、昨年11月にマサチューセッツウイスターに拠点を置くバイオ技術会社のアドバンスド・セ

ル・テクノロジ社によって発表された。その科学者たちは、人間細胞の核を牛の卵子と融合させることによって種々のクローン人間の創造に成功した。

この牛と人間の融合に不快感を示す者もいれば、このような混合物に有益な造血幹細胞が作り出せるのかといった技術的問題を提起する評論家たちがいる中で、この技術は、もつと攻撃的な手法である人間の胚のクローンなどの造血幹細胞の創造からの倫理的逃避だと考える人々もいる。また、牛の卵子は人間のものよりもずっと数が豊富なのである。

しかし、心臓移植第1号あるいは試験官ベイビー第1号の直後は嫌悪感があったが、今はないように、細胞や組織の供給をまかなうための初期の胚の利用が利益をもたらすことがはっきりすれば、「嫌悪要素」はなくなる。と多くの科学者たちは反論する。

さらに、これらの研究は、数が足りないといわれている人間の卵子の必要性和関係なく組織を成長させる技術をもたらすことになるだろう。そして人間の胚も成長させる必要がなくなる。つまり、科学者たちは、成人の細胞を直接造血幹細胞に転換させる方法を見いだしたいのである。

幹細胞とナチスの論理

クリントン政権は先頃、国が資金援助して行なう胚性幹細胞（ES細胞）の研究を認める一連の新しい基準を発表しました。次いでその決定を支持する人たちが非論理的な意見がたくさん出されまし。中絶反対の人々は、幹細胞研究の過程で破壊されるヒト胚は「いのちの可能性のあるもの」だと考えているので、そのガイドラインに反対していると、ニューヨーク・タイムズ紙には書かれていました。コラムニストであるマイケル・キンズリーは、「幹細胞研究への反対は、議論倒れの生きる権利の主張です。ヒト胚よりも金魚の方が人間に似ていて、人のいのちの始まりは事実に基づいた問題ではないのです。」と、同時発表のコラムの中で述べました。キンズリーはさらに結論にいたる途中で、「人のいのちとは、私たちが与えるレットテルなのです。」と述べています。

クリントン政権は先頃、国が資金援助して行なう胚性幹細胞（ES細胞）の研究を認める一連の新しい基準を発表しました。次いでその決定を支持する人たちが非論理的な意見がたくさん出されまし。中絶反対の人々は、幹細胞研究の過程で破壊されるヒト胚は「いのちの可能性のあるもの」だと考えているので、そのガイドラインに反対していると、ニューヨーク・タイムズ紙には書かれていました。コラムニストであるマイケル・キンズリーは、「幹細胞研究への反対は、議論倒れの生きる権利の主張です。ヒト胚よりも金魚の方が人間に似ていて、人のいのちの始まりは事実に基づいた問題ではないのです。」と、同時発表のコラムの中で述べました。キンズリーはさらに結論にいたる途中で、「人のいのちとは、私たちが与えるレットテルなのです。」と述べています。

重度の障害者を排除する義務があるという考えを推し進めるために、一九二〇年代にドイツの法学者カール・ビンディングと、著名なドイツの精神科医アルフレッド・ホーへによってなされたものです。「生きる価値のないのち」というその考え方が、ホロコーストに対する文化的な根拠を与える役割を担ったのです。トマス・ジエファアソンとアメリカ建国に関わった人々は、生きる権利は「奪つことができないもの」、つまり人間が固有に持っているもので国家が与えるものではないという「自明の」道徳的真理に基づいて、アメリカの独立に対する権利を正式に主張したのです。「人間のいのちは私たちが与えるレットテルである」という主張の論理は、反対の方向を向いています。それはビンディングとホーへの考え方と同じようなものです。人間が、自分とは違って見える人々の人間性をなかなか認められないというのは、人間古来のさびしい現実なのです。しかしながら、ヒト胚の人間性を否定する議論は、しばしば自由主義者の間から起こるのは特に奇妙なことです。なぜなら彼らはかつて「相手」の人間性を認めることが得意であること、共通の関心を持った集団と法的な保護の境界を広げることが自負していたからです。今ではもはやそうではないようです。

クリントン政権のガイドラインは驚くべきもので、法律上のごまかし、しかもかなりお粗末なごまかしです。過去四年間に渡って保健社会福祉省の年予算は、「ヒト胚が破壊されたり、捨てられたり、故意に傷つけられたり殺されたりする危険にさらされるような研究」のために政府の資金を使うことを禁じてきました。しかし新しいガイドラインでは、政府の資金援助を受けた研究者が、幹細胞を生きている胚から自分の手で採取せずに、個人の人工受精を行なっているクリニックから購入する限りにおいて、政府の資金援助を受けたES細胞の研究を容認しています。それは、ポンティオ・ピラト（キリストの処刑を許可したローマの総督）を誘惑したかもしれないような法的な「解決策」です。最新の科学によって、幹細胞研究で約束されたような莫大な医療的恩恵をもたらす効果的な研究は、大人の骨髄細胞や、臍帯や胎盤からとった幹細胞で行なうことができることが示されています。従って、新しいガイドラインは恐らく必要のないものでしょうが、それらが道徳に反していることは確かなことです。そして、新しい幹細胞論争に伴う混乱は、バイオテクノロジー革命が本格的に始まるにつれて我々の社会生活の知的道徳的健全さが脅かされそうになる危険性を示しています。

ジョージ・ワイゲル

知的障害女性に中絶強要

仙台市の知的障害者施設が非難を浴びている。同施設はすでに妊娠6ヶ月であった女性に陣痛促進剤を使用させ、中絶を強要した、と市民団体が9月18日に発表した。

名称は明らかにされていないが仙台市太白区その施設は、一九九一年促進剤によって早産を強要し、女性の人権を侵害した、と、チャレンジドネットワークみやぎの職員らが非難している。

施設に通っていた当時二十代前半であった女性は、男児を出産したが、職員らの話では男児は後に死亡したという。この件を調査している弁護士によると、墮胎によって胎児が死亡したことから、女性の保護責任者は殺人あるいは遺棄の罪に問われる可能性がある。母子保護法（一九九六年に優生保護法より改正）では妊娠22週目以降の中絶は禁じられている。

一九九一年当時の施設長は女性の出産があったことを認めているが、促進剤を強要したことについては否定している。「彼女を診療所の相談室まで連れて行った。しかし出産を強制した覚えはない」と元施設長は述べた。

しかし人権保護を掲げる団体側は、施設長が中絶の目的で女性に薬剤を投与するよう診療所に申し入れたことは明らか、と主張している。仙台マタニティ・クリニックの当時の医師らは、陣痛促進剤を投与することに賛成ではなかったという。

若者と自殺の傾向

「なぜ?」! 十代の若者が自殺したり、自殺を試みたとき、この疑問が常に持ち上がる。一体なぜ若者は自らのいのちを絶とうとしたのか? 精神病医学者、心理学者、公序良俗の擁護者たちは、この深刻な問題に対する答えを見つげるために多くの研究を行ってきた。だが答えは単純ではない。それは若者自身のように複雑なものである。

心理学的研究の結果、十代と自殺とを結びつけるものが数多く発見された。典型的要因として憂うつ感と絶望感が第一に挙げられたが、それは驚くには値しない。アルコール中毒や薬物の濫用も自殺を試みる若者にはよくある問題である。性的虐待を受けた経験もまた自殺の原因となりうる。

しかし若者と自殺を結びつける重要な要因は、メディアの主流からしばしば見落とされている。多くの医学的研究は十代の自殺の最も重要な要因として家庭崩壊を正確に指摘している。一九八七年に「コンサルティングと臨床心理学ジャーナル」に発表された研究報告は、「本研究例において、自殺行為を引き起こす最大の要因は、子どもたちが自分の家庭環境をどのように受け止めているか、という点にあった」と結論づけた。「アメリカ矯正精神医学誌」が一九九三年に発表した研究報告でもこのつながりが指摘された。それは「家族間の衝突が大きいほど、また家族の結束がゆるいほど自殺行為に結びつく傾向がある、ということが分かる」としている。

実際、ペンシルバニア州立大学の社会学者ロバート・スタック氏の指導で行われた研究は、離婚と十代の若者の自殺との関連を証明した。スタック氏は、若者の自殺率は離婚率に従って増加するばかりか、離婚率が下がるとそれに比例して減少する、ということも発見した。

だからといって離婚のあった全ての家庭で十代の若者が自殺する、というわけではない。しかし、先に挙げた研究結果は、自殺する傾向と離婚家庭の子どもたちが直面する苦悩との関連を確かに指摘している。

ティーンズ・イン・タッチと国立自殺相談センターの理事であるT・ミッチェル・アンソニー氏はそれを、子どもは両親の離婚のことで自分に責任を感じがちであるから、

【プロ・ライフニュース】

[101] 1部ご注文.....無料..... + 郵送料

【カラー・パンフレット】

- [201] 生か死..... + 郵送料
- [202] 第二の処女生..... + 郵送料
- [203] デート..... + 郵送料
- [204] どうするの?..... + 郵送料
- [205] "NO"という技術..... + 郵送料
- [206] ティーンの出産コントロール..... + 郵送料
- [207] パージンの瀬戸際..... + 郵送料
- [208] していましたか..... + 郵送料
- [209] 親権限と「10代の性」..... + 郵送料
- [210] 貞節のすすめ..... + 郵送料
- [211] 中絶行為は女性を解放しない..... + 郵送料

【ポケット・サイズ】

- [301] 若い生命「1セット=カード+人形」.....30円 + 郵送料
- [303] 国際プロ・ライフ・シンボル・ピン.....200円 + 郵送料
- [304] 国際プロ・ライフ・ネックレス.....500円 + 郵送料
- [305] 胎児の人権宣言カード.....30枚=100円 + 郵送料
- [306] ミニソフィアAce エース(税別).....7980円 + 郵送料

【ビデオ+ 本・日本語】

- [401] 沈黙の叫び...(VHS/Beta).....7000 + 郵送料
- [403] ビリングス・メソッド.....(VHS/Beta).....7000 + 郵送料
- [404] いのちーおくりもの.....(VHS).....13000 + 郵送料
- [407] 命美しいもの = one&only.....(VHS).....20000 + 郵送料
- [409] 聞こえる? 天使の鼓動.....(VHS).....6000 + 郵送料
- [410] ビル先進国・英国からの警告...(VHS).....15000 + 郵送料
- [411] (コース・セミナー) エイズ時代の性倫理...(VHS).....3800 + 郵送料
- [500] (本) 生命問題に関する... (カトリックの教え).....2987 + 郵送料
- [501] (本) 自然な家族計画...(ビリングス・メソッド).....1000 + 郵送料
- [503] (本) プロ・ライフの旅.....300 + 郵送料
- [504] (本) 小さな鼓動のメッセージ.....1200 + 郵送料
- [505] (本) いのちをみつめて.....500 + 郵送料
- [506] (本) 命あるすべてのものに(マザー・テレサ).....650 + 郵送料
- [507] (本) 私の生命を奪わないで.....2300 + 郵送料
- [508] (本) いのちの福音.....1500 + 郵送料
- [509] (本) 小さき生命のために.....1300 + 郵送料
- [511] (本) 赤ちゃん: 最初の十ヶ月...12ページ...100 + 郵送料
- [512] 本 日本プロ・ライフ・ムーブメントについて.....300 + 郵送料
- [513] 本 カトリック教会と日本プロ・ライフ・ムーブメント.....500 + 郵送料
- [514] 本 神様は中絶をどのように言っておられるでしょう.....300 + 郵送料
- [515] (本) 経口避妊薬: ピル.....100 + 郵送料
- [516] (本) いのちの福音と教育.....1470 + 郵送料
- [516] (本) フマネ・ヴィテ.....300 + 郵送料

国会での中絶反対抗議集会

と要約している。アンソニー氏は著書『自殺! 我が子が危ない』の中で、「離婚をした親たちは必要以上に心の痛みや罪悪感をつのらせることはない。しかし、離婚の結果、子どもの心に生じた感情や子どもが直面している現実に対しては、敏感でなければならぬ」と述べている。

(アルティメット・プロ・ライフ・ニュース)

地域のリーダーや宗教の指導者、そして政治家たちが、南アフリカの中絶合法化3周年を記念して中絶反対祈禱会をしようとする国会に集結しました。

彼らはいのちの神聖さに関する祈禱宣言書に署名し、国会のメインゲート前で夜通し祈りを捧げ、プラカードを掲げてデモをしました。10週目の胎児の足と同じ大きさの小さい銀の足形をした記事が配られ、中には白い十字

架をつけている人もいました。

アフリカキリスト教民主党(ACDP)のリーダーである、ケネス・メシュー氏は、「人は、神の目から見た自分の価値が理解できるまでは、一人一人の胎児の価値を理解することはできない。」と話しました。

ACDPは、中絶が合法化されて以来10万人以上の胎児が殺された、声明の中で語りました。また、看護婦や助産婦が中絶を強制されたり、中絶すれば報奨金や昇給が与えられているという事実を知ってACDPは驚いているとメシュー氏は話しました。

3年前に中絶法案が可決されてから、中絶で殺された10035人の赤ん坊を表している、およそ30000個の白い十字架がダーバン市役所の石段に置かれました。その十字架は、我が子を中絶してしまつて、埋葬しようとしている女性たちの悲しみを証言するものでした。「プロ・ライフ運動」のマッシモ神父は、中絶と戦つたことは、中絶という問題のほんの一部にすぎず、「我々の運動は、生きる権利を支持するだけでなく、いのちの価値のためにも闘っているのです。」と説明しました。

[511] **赤ちゃん: 最初の十ヶ月の旅**

[515] **経口避妊薬: ピル**

注文:	1 - - - - 5	1部 = ¥ 100
	6 - - - - 20	1部 = ¥ 75
フルカラー	21 - - - 999	1部 = ¥ 50
	1000 - - 以上	1部 = ¥ 35

性教育の材料として、学校、教会、家族、産婦人科

(本) フマネ・ヴィテ

1 ~ ~ 30	1部 = 250円
31 ~ ~ 100	1部 = 200円
101 ~ ~ 以上	1部 = 150円

パンフレット押し込み

1 ~ ~ 5	1部 = 35円
6 ~ ~ 100	1部 = 25円
101 ~ ~ 500	1部 = 20円
501 ~ ~ 以上	1部 = 15円

組み合わせ自由です

十代の性(11)

質問：一度だけ過ちをおかし、ある男の子と寝てしまいました。その後すぐ彼とは別れました。今の恋人に私が処女でないことを告げるべきでしょうか？

答え：人生に失敗はつきものですが、そこから学ぶことが大切なのです。過去の過ちはどうすることもできませんが、これから先それを繰り返すまいと自覚が生まれます。セカンドバージンという言葉は耳にします。今後結婚まではもうセックスしないという決意がこめられています。そのためあなたには意識を改め、恋人に自制心をなくさせるような危険な状況に身

を置かないよう徹底しなければなりません。ぜひとも慎ましい愛情表現法を身につけましょう。

結婚するまであなたは何人かの男性とつきあうかもしれませんが。そのたびに自分の過去を語るの賢明とは言えないし、その必要はありません。ただ、結婚相手に秘密をもつのはよくないし、信頼関係の妨げのもとです。結婚前に時期を見計らって、相手に過去の秘密を受けとめてもらえるほど愛が深まったら思い切って告白しましょう。あなたの目に狂いがなければ、将来夫となる彼は最初は驚き落胆したとしてもあなたを愛し受け入れてくれるはずですよ。

選ぶ権利が？

私は今回の中絶のビデオ(沈黙の叫び)を見て、とてもショックでした。宿って何週間しかたっていないくても、とても小さいけど、私はそれは立派な人間なのだと思います。それなのに、無残にもお腹の中で切り裂いたり、頭をつぶすような恐ろしい光景があった。中絶するしか無いというより、母親に中絶することを選ぶ権利があつていいのか私は不思議に思いました。お腹の子どもは、何もしゃべることが出来ないから。

もし、子どもが出来たら迷うこと無く私は産むことを選びます。

事務所便り

桜満開の頃、皆様にはお元気で過ごしてでしょうか。

先月号の事務所便りでお伝えさせて頂いた、挿入紙を一枚入れる必要のない『フマネ・ウイテ』の本が出来上がってきました。お値段は多数買つて頂いた時には、こちらが少し負担して、次のようにさせて頂きます。一冊、三十冊までの注文は一冊二百五十円、三十一冊、百冊までは一冊二百円、百一冊以上は一冊百五十円になっています(送料はそちら持ち)。尚、挿入紙を一枚入れる必要のある分は送料分のみそちらで負担下されば、先月に引き続き希望の冊数をお送り致します。

読売新聞の二月一日にロックフェラー大・若山照彦助教授が一九九七年二月、クローン羊「ドリー」誕生発表以来急速に発展した体細胞クローン技術だが、まだ課題が多く、実用化は時期尚早と述べた一方で、二月四日クローン人間作り国際組織結成と読売新聞に掲載されました。それには来月八日、ローマで『国際クローン人間ワークショップ』が開かれ、十月にはモナコで二回目の会合が開かれるとのこと。日本や英仏ではクローン人間作りを法律で禁じているにも関わらず、その会合には日本人専門家も参加する予定とされている。

また、ヒトES細胞の基礎研究を阪大倫理委員会が国内初でゴーサインを出したこと(読売新聞二月十六日)、日本産科婦人科学会はES細胞研究に受精卵利用を今まで限定してきたが、学会として協力するため、ガイドラインを見直すことを決め、五月の総会での決定を目指している(読売新聞二月二十五日)

日本では、生命をめぐる議論が盛り上がりにくい傾向にあるけれど、きちんと議論しなければいけないことだと思えます。是非皆様の声をお送り下さい。